

太平記享受史研究 論文概要書

加美 宏

論文概要書

本論文は、南北朝の動乱を描いた軍記物語

『太平記』について、受容史・影響史・研究

史等を総合した享受史の研究をめざしたものであり、中世期・近世期を主対象としている。

『洞院公定日記』の応安七年（一三七四）

五月三日条の「伝聞、去廿八九日之間、小島

法師円寂云々、是近日翫天下太平記作者也、

凡雖為卑賤之器、有名匠聞、可謂無念」とい

う記事が示唆しているように、『太平記』は

その成立当初の頃から人々に賞翫されてい

たようであるが、それ以後、近代に至るまで

、文芸作品として、或いは歴史書として、ま

た時には兵法書・思想書として、すこぶる広

く享受され、後代に大きな影響を及ぼしてお

り、その流布や影響の広さ、大きさという点

では、『平家物語』に勝るとも劣らないとい

えるであろう。

こうした『太平記』の享受・影響について

は、部分的には優れた研究も出されてゐるが（例えば後藤丹治氏による近世読本への影響の研究―『太平記の研究』など）、その史的な変遷をたどり、総合的・体系的な考察を加えた享受史研究は、これまで見当らないようである。本論文は、そうした方向をめざした享受史研究の第一編にあたるものであるが、享受や影響からうかがえる『太平記』の性格や特徴を手がかりとして、その文学的特質や文学史的位罫を改めて見直してみたいと考える。

たことも本研究を志した契機であつた。

第一章では、『太平記』の受容・影響・研究等を包括した享受史を意図した本論文の序章として、中世から現代に至る『太平記』享受史の史的展望や、中世から近世における『太平記』の流布・影響・研究等の実態を具体的に解明し、史的に位置づけることを試みてゐる。第一節『太平記』享受史の展望において、その一で、まず中世期における『太平記』享受の状況について、總体的展

望を行っている。中世では、『太平記』の伝
本そのものは多くなかったが、物語僧・談義
僧や公家などによる「読み」という口誦活動
によって広まったことや、文芸書としてより
も、南北朝時代を記した歴史書として、或い
は一族一家の勲功録や政道・兵法の書として
、いわば実用的に受容される場合が多かった
ことなど、中世における『太平記』の享受の特
徴点をいくつか指摘した。

第一節の「その二」は、『太平記』が、こ

れまでどのように評価され、受容されてきた
かという点について、中世から現代に至る
各時代の特徴をとらえながら、巨視的に展望
してみたものである。中世から近世初期につ
いては、本論文の後の部分で詳説しているの
で、それ以後のことにはふれてみると、近世で
は、由比正雪の謀反の扱いどころとなる一方
、幕末の尊皇の志士たちを鼓舞したのも、『太
平記』であつたという多面的性格を指摘した。
近代においては、南北朝正閏論に端を発し、

『太平記』の南朝忠臣の物語が修身の教材となり、忠君愛国の理念を具象化した聖典とされて、文芸としての自由な享受や研究が不可能となった受難の歴史と、戦後におけるその解放について述べた。

『太平記』は、公武の戦い、南北両朝の抗争といった、いわば政治を主題とした作品であり、多種多様な合戦・争闘が記述されている。戦いの百科全書ともいえる。こうした面からの『太平記』受容の歴史を展望したのが、

『その三』の政治・軍学の書としての『太平記』である。

『太平記』は、実録的性格の強い『記』系

統の室町・戦国軍記の先駆とされ、それらに大きな影響を及ぼしているようにみなされてきた。これについて検討してみたのが、第一

章の第二節『太平記』の影響―室町・戦国

軍記『である。』記』的なスタイルは継承さ

れているといえるが、直接的な影響関係は、

『応仁記』に顕著にあらわれているほかは、

意外と少なく、この期における『太平記』伝本の稀少な流布状況が反映されているように思われる。『太平記』の影響が目立って多くなるのは、やはり近世から以降である。

中世の室町期における『太平記』の伝本流布に関連して注目されるのは、文明十七年（一四八五）十月、十二月の頃に、後土御門天皇から、古典通の公家たちに、『太平記』の分担新写の命が一斉に下り、集めて写本を完成させた上、三条西実隆らに、それを用いて

諸本との校合作業を行なわせている。これは、応仁の大乱後の文化的荒廃状況の中で、後土御門天皇が推進した古典復興事業の一環をなすものであった。このことを『十輪院内府記』などによって紹介し、その意義を考えたのが、第一章の第三節『『太平記』の書写と校合』、『十輪院内府記』である。

右の文明十七年における『太平記』の校合などにも、研究意識のめづりが認められるが、『太平記』の研究や批評は、すでに中世か

ら始められており、中世末から近世にかけて、注目すべき成果があらわれている。この期の『太平記』研究史は、これまでほとんど閑却されていたので、享受の問題とからませながら、その成果と発展の過程を、やや詳しく検討してみたのが、第一章の第四節「中・近世における『太平記』研究史」である。『その一』の「研究以前と『太平記』開書』では、永正年間（一五〇四～二一）頃までに成ったと推定される、最古の注釈書『太平記開書』をとりあげ、その注釈が啓蒙的なものであること、抄物の一類であることを指摘した。『その二』の「『太平記』賢愚抄』では、天文十二年（一五四三）、僧乾三によって著作され、慶長十二年（一六〇七）に刊行された『太平記』賢愚抄』が、やや未整理な面もあるが、『太平記』中の要語・難語につき、和漢の出典をさぐり考証したという点において、学問的な注釈書の端緒を切り開いたことを評価した。『その三』の「諸本書写・伝本流

布の時代¹は、現存写本の多くが書写され、武家を中心に『太平記』写本が流布しはじめた中世末の十六世紀後半を、近世における『太平記』の流布や研究を準備した時代として位置づけたものである。

近世初頭、『太平記』が古活字版で盛んに版行されるのと同時に、現代でもなお参照するに足る本格的な注釈書『太平記鈔』が刊行された。日蓮宗の学僧日性²の著で、慶長十五年（一六一〇）に版行されたもので、墨質と

もに『太平記賢愚抄』も超えた学問的な注釈書である。この書の内容・特質を検討し、研究史上の位置づけを試みたのが、その四の『太平記鈔』である。同じく近世初期には、『太平記』の評判書『太平記評判秘伝理尽鈔』、『太平記評判私要理尽無極鈔』などが世に行われたが、この評判書と前記の注釈書と『太平記』本文などを集成した上、独自の論評や注釈もそえた『太平記百科』というべき『太平記大全』（西道智著、一六五九年

刊) 太平記綱目 (原友軒著、一六六八年刊) も版行されている。この二著の内容を紹介し、検討した上で、その研究史上の意義を考えてみたのが、第四節の「その五」その六である。

四十巻の長大な作品である『太平記』には中世から近世にかけて、さまざまな形の『抜書』が作られている。それは、全巻のダイジェスト版であったり、キリシタン版として作られたものであったり、異本の異文を抜書

としたものであったり、特定の寺院や人物に関わる部分の抜書であったりする。それらを系統別に整理・紹介して、享受との関わりを考えてみたのが、第一章の第五節「『太平記抜書』の類」である。

ところで、中世から近世にかけての『太平記』享受において、特徴的なことは、中世の物語僧・談義僧の『太平記』読みから、近世の太平記講釈に至るまで、読み・聴聞という形で享受されることだが、非常に多かった

ということである。これは『平家物語』に
 ける「語り」の問題に匹敵するが、これまで
 この『太平記』の「読み」の実態や変遷に
 ついては、具体的かつ系統的に検討されるこ
 とがほとんどなかったので、「読み」という
 享受形態に関わる諸問題を考えてみたのが
 第二章「『太平記』読みと享受」である。
 『太平記』の成立や作者に関する最もはや
 く確かな史料として重要視されている『洞院
 公定日記』応安七年五月三日条の記事（本概
 要書冒頭部に引用）を享受資料として検討し
 てみたのが、第二章第一節の「『洞院公定日
 記』——『太平記』の作者と享受」である。こ
 の記事で「卑賤ノ器」といわれている小島法
 師を、この日記の用例などから散所法師と推
 定し、こうした卑賤の作者の登場は、享受層
 の広がりをも示唆することや、「天下ニ翫ブ
 太平記」とある「翫ブ」の用例分析から、文
 芸的作品として賞翫・享受されていたと考
 えられることなどを指摘した。

今川了俊が、『太平記』には誤謬・遺漏が多いと批判した。『難太平記』(一四〇二年成立)も、『太平記』の読み方をうかがう上で、の好資料であるが、『読み』ということとの関連でいえば、『太平記多謬事』の項に、足利直義が玄恵法印に、『太平記』を朗読させたとき記されているのが注目される。玄恵は、いわば最初の『太平記』読みではないかと考えてみたのが、『第二節の』、『難太平記』、『太平記』の批判と、『読み』である。むしろと明確な形で、『太平記』の『読み』を記している最初のもの。『看聞御記』である。同記の永享八年(一四三七)の記事には、日記の筆者貞成親王ら公家の人々による『太平記』の朗読、読み聞かせのことが出てくる。宴席などで読まれているから、余興・慰安的な性格の『読み』であつたと思われる。同記にはまた、『酒宴御着』に、『明徳記』を語る物語僧も登場する。これらを紹介し検討を加えたのが、『第三節』、『看聞御記』、『公家の』

太平記^と読みと物語僧^とである。

物語僧の^と太平記^と読みを明示した史料は

見当たらないが、物語僧と推定される座敷芸能

者が、^と太平記^とを読んだことが記録されて

いるのが、^と蔭涼軒日録^と文正元年（一四六

六）閏二月の記事である。この記事には、日

録の筆者季瓊真薬をはじめとする赤松氏ゆか

りの人々が、有馬温泉での湯治のつれづれに

同じく赤松氏の一族で、眼の不自由な江見

河原入道が、^と太平記^との、それも先

祖赤松円心らの活躍の段を感激をもって聞く

という、中世における典型的な享受例がみら

れるのである。この江見河原入道を物語僧と

推定し、この日録記事の意味するところを考

えたのが、^と第四節^と蔭涼軒日録^と—物語僧

の^と太平記^と読みである。この^と蔭涼軒日

録^と記事と同一年に、經典談義の場において

一禅僧が^と太平記^とを読んだことが、^と後

法興院記^と文正元年五月二十七日条に記録さ

れている。^と親長御記^と延徳三年（一四九一

一 五月十六日条にも明証があるように、この
 期の談義僧・説経僧は、堅苦しい談義・説経
 の後に、アトラクション的に『太平記』を讀
 んだようであり、多数の聴衆の集まる場であ
 っただけに、『太平記』の普及・流布に大き
 な役割を果たしたと考えられる。また、『後法興
 院記』には、『太平記』の『劔巻』に関する記
 事があり、近世に盛んに刊行された『太平記
 』劔巻は、すでに中世から結びついていたこ
 とを紹介した。これが第五節の『後法興院

記』——談義僧の『太平記』讀みと『劔巻』
 である。
 『太平記』が戦国武家に愛好されたことは
 さきにもふれたが、戦国期の地方武士（島
 津家老）が、戦陣の宿舎などで、『太平記』
 を武士らに讀み聞かせたことが、『上井覚
 兼日記』にみえている。同記には、『雨中』と
 か、『月待』などの消閑・慰安のために、『太平
 記』を讀むなど、楽しみとしての『太平記』
 讀みの記事が多いのも興味深い。この日記を

通いて、戦国期の『太平記』読み、状況をか
 ぐったのが、第六節の『上井覚兼日記』
 戦国武士の『太平記』読みである。中世か
 ら近世への転換期を生きた公家山科言経の日
 記『言経卿記』にも、『太平記』読みに関す
 る記事が頻出する。言経は、正成の子孫を称
 した楠長諸の子や、妻の姉妹にあたる興正寺
 佐超室母娘などに、たびたび『太平記』の読
 み聞かせを行っており、女性に愛好されてい
 ることなど、この期の『太平記』読みと享受
 の状況がよくうかがえる。この『言経卿記』
 の『太平記』関係記事につき、紹介と考察を
 行ったのが、第七節の『言経卿記』――戦国公
 家の『太平記』読みである。
 続く第八節の『中世から近世へ――浪人・医
 者らの『太平記』読み』では、これまで注目
 されていなかった中世末期から近世初頭にお
 ける『太平記』読みについて、
 諸『狂歌之詠草』などの資料によつて、浪
 人医者徳本の『太平記』読みや、慶長八年（

である。

一六〇三）羅山を中心に行われた古典の公開講義における医師遠藤宗務の『太平記』講釈などを紹介し、近世の太平記講釈の先駆的なものとして位置づけてみた。第九節の『物語僧小考』、『大塔物語』所出の頓阿をめぐって、は、中世における『太平記』読みの一翼を荷ったと思われ、物語僧に関して、その風貌や芸能を具体的に伝える貴重な資料として、室町期の地方軍記『大塔物語』に登場する頓阿なる物語僧の描写に検討を加えてみたものである。

第十節の『琵琶法師と太平記読み』は、第二章『『太平記』読みと享受』の一つのまとめとして、中世における琵琶法師の『平家物語』の語りと、物語僧・談義僧などによる『太平記』の読みとを対比しつつ考察し、『平家物語』が物語僧などの演目に上らず、『太平記』が琵琶語りへのせられることがなかったのは、作品の質的な違いによるところが大さかったのではないかと考えてみたものである。

る。

これまでみてきたような中世期の『太平記』の「読み」という享受活動から、近世における芸能としての太平記読み・太平記講釈が形成される初期の過程を追跡したのが、第十一節の「近世太平記読みの形成」である。紀州三浦家文書の中の『家乗』という好資料の出現によって、近世期の芸能化された「太平記読み」という呼称の初出を、従来の元禄三年（一六九〇）『人倫訓蒙図彙』による）説

から、貞享三年（一六八六）に引き上げることにできたし、初期の太平記読みの実態を、かなり明らかにすることができたと考えている。

こうした太平記読みの問題と並んで、近世期の『太平記』享受を特徴づけているのは、いわゆる評判書が盛んに行われ、『太平記』そのものに劣らず流布し、その講釈まで行われたことであろう。この『太平記』の評判書、すなわち『太平記評判秘伝理尽鈔』とその

類書『太平記評判私要理尽無極鈔』について成立・流布・特質・影響などの面から検討を加え、享受史上の意義・位置を考えてみたのか、第三章『太平記評判』考説である。その第一節の『太平記評判秘伝理尽鈔』をめぐって、これは、これまで兵法の秘伝書として注目された程度で、『太平記』研究の側からの考察は皆無に等しかった。『理尽鈔』について、この書が近世のごく初期に世に出たもので、混同されがちな『無極鈔』は同類の別書であること、『評云』という兵法・政道などの面から、『太平記』の内容に論評を加えている部分は、文芸とは無縁なものであるが、『伝云』という『太平記』本文には載せられていない異伝・異説の類を多くかかげている部分には、『太平記』外伝、或いはもう一つの『太平記』といった世界をつくり出したものとして注目すべきことを主張したものである。

この『理尽鈔』は、近世初期に加賀をはじめ各地で講釈が行われ、そのテキストとなっ

たものであるが、その講釈の実態は必ずしも
 明らかではなかった。ところか、理尽鈔
 の巻十と巻二十五の巻末部分に、太平記
 を初・中・終の三段に分け、初段三回・中段
 二回・終段一回の講釈聴講を規定するなど、
 講釈の順序や階梯にふれた記事がある。また
 理尽鈔本文中に、口伝という傍書書
 き入れがあるなど、その講釈の實際をうかが
 う資料が、理尽鈔そのものにあることを指
 摘したのが、第二節の「太平記理尽鈔」講
 釈の資料についてである。

では、理尽鈔が、太平記の書名や序
 文の解説においても傾聴するに足る所説を提
 起していることを述べ、またその成立に関し
 て、理尽鈔に付載されている、今川駿
 河守入道心性が、名和肥後刑部左衛門に
 対して、理尽鈔の伝授と筆写許可を感謝
 した「文明二年八月下旬六日」付の書状風奥
 書は、おそらく仮託されたもので、実際に本

書が世に出たのは近世初頭と考えられるが、その仮託には、それなりの根拠・理由があつたことを推定した。

『理尽鈔』の冒頭部には、『名義并来由』という一項があつて、『太平記』の名称・成立事情・作者について、すこぶる具体的な所説が述べられている。そこには、例えば新田義貞を作者の一人にあてゐるなど、確証の求めにくいものが多く、これまで荒唐無稽な説とみなされてきた。しかし、子細に検討してみ

ると、意外に『太平記』の内容・特質をよく把握した上での立論であつたり、ある種の論理や根拠を持った所説であつたりする場合も少なくないのであつて、『太平記』の名称・作者・成立に関する最もはやい研究文献として、これを位置づけてみたのが、第四節の『太平記理尽鈔』の『名義并来由』である。

『理尽鈔』は、近世初・中期において、『太平記』そのものに劣らず大いに流布し、さまざまな分野に影響を及ぼしているが、その

一つの例として、徳川幕府創立以前の本朝の
 歴史を、幕府の立場から記述した『本朝通鑑』
 の（林羅山・鷲峰編集、一六七〇年完成）の
 南北朝時代史の記述において、『太平記』と
 並ぶ重要な史料として、『理尽鈔』が盛んに用
 いられていることを指摘し、その影響の大き
 さをさぐったのが、『第五節の』『太平記理尽
 鈔』と『本朝通鑑』である。
 この『太平記評判秘伝理尽鈔』が正保二年
 （一六四五）に刊行されると、続いて同類の
 評判書『太平記評判秘伝理尽無極鈔』や『平
 家物語評判秘伝抄』、『甲陽軍鑑評判』、『義経
 記評判』など、軍記物を対象とした評判書が
 次々に刊行されている。また、『理尽鈔』の十
 年三十年後あたりから、『遊女評判記』、『野郎
 評判記』、『役者評判記』なども出現しており、
 『理尽鈔』は、『軍記評判』という新たなジャンル
 を創始したばかりでなく、近世の諸評判記の
 先驅をなしたという点でも注目すべき存在で
 あることを述べたのが、『第六節の』『評判記の

先駢一軍記評判である。

さきに『理尽鈔』の歴史書への影響をみた

が、文学・芸能等の面でも、少なからぬ影響

がみられる。例えば、楠木正成が、敵をあざ

むくために使ったという泣男杉本佐兵衛のこ

とは、近世において、すこぶる人口に膾炙

し、川柳狂句に多く詠まれており、楠木物

読物や浮瑠璃などでも大きな活躍ぶりをみせ

ている。この話のとは、『太平記』巻十五

にあるが、泣男に杉本佐兵衛という名を与え

、正成が、あらかじめ、こうしたこともあろ

うかと、泣くこと以外には何の芸もない佐兵

衛を召しめかえておき、それをあざやかに治

用してみせたという話に発展させたのは、『

理尽鈔』である。そうした展開過程を具体的

にたどり、『理尽鈔』の流布と影響を測定し

てみたのが、第七節の『楠木正成と泣男』

太平記評判の影響である。

第八節『太平記評判』に関する補説は

本章の第一節から第七節まで展開してきた

『太平記評判』の考察に補説を加え、そのま
 とめとしたものである。まず『理尽鈔』と
 無極鈔』を同一書と混同したことによる事実
 誤認を訂正して、両書が同類だが別書である
 ことを再確認し、『理尽鈔』の成立時期に關
 して、一部で主張されている中世期成立説に
 対して、小瀬甫庵の晩年の著作『永祿以来事
 始』によつて、近世初頭出現の説を補強した。
 次に『無極鈔』も、時に『太平記評判』と呼
 ばれ、かなり広く流布して影響を及ぼしてい
 ることを、『無極鈔』巻十六に出てくる楠木
 正成の風貌についての記述が、近世も現代
 に至るまでしばしば引かれていることを例
 として述べた。
 『理尽鈔』が、変容せるもう一つの『太平
 記』世界を形成しているのと同様に、『無極
 鈔』もまた独自の『太平記』外伝として読ま
 れ、影響を与えており、この両者をあわせ
 『太平記評判』というものの存在が、近世に
 おける『太平記』享受を大きく特徴づけるも

のであったことを、さまざまな面から考察し、
『太平記』¹ 享受史に位置づけてみたのが、
第三章『『太平記』評判』² 考説である。

本論文は、中世・近世における『太平記』³
享受史の諸問題、とくにこの期における『
太平記』⁴ の流布と影響の問題、研究史の問題、
或いは『太平記』⁵ 読みに関する問題、⁶ 太
平記評判』⁷ をめぐる『太平記』⁸ の受容と変容
の問題など、従来ほとんど研究の及んでいな
かった問題に研究の鉄を入れたものであるが

、中世・近世に限っても、なお考察を深め、
進めるべきところは少なくないので、本論文
の第一章第一節『『太平記』⁹ 享受史の展望』¹⁰
で示した研究の方向を、さらに進めてゆきた
いと考えている。